

## 七十一歳ひと夏の経験

加西市広報六月号に、市政五〇周年記念事業の一つとして、NHKのど自慢大会が九月十日に開催されるとの記事があり、出場者と観覧者の募集があった。五月初め亡くなった母の逮夜を、毎、日曜日の夜、親族、親戚が集まり執り行っていた。

お経を上げたのち、食事をしているとき、のど自慢大会の話題になった。ぶどう栽培者も数名いて、加西のぶどうを広く全国に知ってもらうため、市のぶどう組合から数名の応募者をだして、広くPRする機会を持つてはどうかとの意見が出た。組合の副会長をしているK君は、アイデアはいいが、販売の真つ最中なので出場者がいないのではないかと、否定的だった。

四十九日の仕上げの手伝いに帰っていた娘が、二人で出場しようと言った。大会に出場するために、東京から帰って来てもいいと言う。ただ、二人で出るにしても歳が離れているため曲を合わせるのは難しかった。「曲が決まったらメールしてね」と帰っていった。

NHKのど自慢には、地元産業枠があるのではないかと思っていた。加西市が誇る農産物は何かと考えたとき、ぶどう以外に無いと考えていた。また、歌は特別上手でなくても出場できるのがメリットだ。この枠に賭けてみようと、締め切りの数日前「宗右衛門町ブルース」を歌いますと、出場応募のハガキを投函した。

NHKのど自慢は前日の予選会に二百五十組が参加して、その中から本選に二十組が出場できるシステムになっている。競争率十二、五倍の狭き門である。三十年前、市政二十周年のときだっただろうか、同じようにNHKのど自慢大

会が開催された。この時、同僚だったAさんが、出場の応募ハガキを出したが、予選会に出場できなかったと言ったことを思い出した。

応募者総数がいくらかわからないので推測するしかないが、門前払いの人がかなりいるようだ。(今回の応募総数は一〇六〇組だった)

まずは二百五十組に入らなければならぬ。このため、申し込みハガキに工夫をすることにした。申込往復ハガキには、歌う曲名、歌っている人に加え、なぜその歌を歌うのかを記入する項目があった。

ここに「加西市特産のぶどうを栽培しています。五月に九四歳で亡くなった母が、歌が大好きで、天国の母に聞いてもらいたいと思い応募をきめました」と書いた。

ハガキを出してからしばらく何もしていないでいたが、お盆に帰ってきた娘に、ハガキを出したことを言うと、「練習しているの」と尋ねるので、「何もしていないよ」と言うと、「カラオケ店に行つて練習しよう」と一緒に行ってくれた。カラオケ店に行ったのは何十年ぶりだろうか。採点機能も充実していた。歌は聞き覚えで歌っていたので、ランキングは平均点以下だった。これは大変、少し練習しないと、仮に二百五十組に入っても本選出場はおぼつかない。以降カラオケ店に通ったが、採点を気にして歌うと評価は悪くなる一方で、困った事になったと思った。

八月も終盤になったが何の連絡もない。親しい人へのど自慢大会に申し込んだと言うと「何を無謀なことを」「あんた歌は上手やったか?」「恥をかかんように気をつけや」「その歳でよく決心したな」と、皆んな呆れるばかり、なかには「何事も挑戦は大切や、頑張つて皆んなに笑ってもらいなはれ」激励とも皮肉

ともとれる言葉が返ってきた。

二十七日、予選会出場の案内ハガキが返ってきた。まずは第一ステップ通過だ。

お願い欄に、いろんな注意書きが書いてあり、歌う曲のCDかMDかカセットテープを持ってきてくださいとあった。慌てて、つたやに飛んでいき、「宗右衛門町ブルース」のCDをくださいと言うと、「古い曲なので廃盤になっていて販売されていません」

どうしよう。これがないと出られないかもしれない。困っていると、「何曲か入っている組曲の中にあるかもしれないません」と探しに行ってくれた。「ありません」と持つてきてくれたCDの中に探していた「宗右衛門町ブルース」が入っていた。ああ一安心。店員が重ねて「これはレンタルできますがどうされますか？」予選会まで二週間以上あるが、もし誰かが借りてしまうと出場できなくなるおそれがあるため、即刻レンタルした。

その日の夜、どのような服装で予選会に出場するかを決めるため、娘たちにiPadで写真を送り、意見を聞いた。応募ハガキに、加西市特産のぶどうを栽培していますと書いていたので、作業をするとき着ている、つなぎ（上下が繋がった服）を着て麦わら帽子をかぶり、胸にぶどうの絵を貼り付けようと思っていた。

ぶどうの絵は準備できていなかったのので、手提げの箱に描いてある絵を切り抜き胸に下げた。「欽ちゃんの仮装大会に出るの？」「なぜ箱を胸にぶら下げているの」「そんなの全然ダメ」と厳しいダメ出しばかり。娘たちも盛り上がってきたみたいだ。

カラオケの練習に成果が出ないので、カラオケ店に誰か歌の指導をしてくれ

る人はいませんかと聞くと、カラオケ教室の先生がいますので連絡を取ってみますといい、四十台の女性を紹介してくれた。

歌の指導をしているだけあって、頭の天辺から高音の声飛び出る感じで、宗右衛門町ブルースも簡単に歌った。彼女は、私の歌を聞いて、「本番まで時間が無いし練習時間も取れないので、口を大きく開けて、リズムに乗って、ゆったりと歌いましょう」

そして「この歌は高音からのスタートですが、あなたには、原曲から四音下げた音で歌うといいと思います。カラオケ店ではダム(DAM)の機械が四音下げた設定になっているので、その機械を指定するのがいいでしょう」とアドバイスしてくれた。確かに四音下げると歌いやすかった。

ところが、予選会出場のハガキには、予選会は生バンドですがキーの変更はできません。本選出場者には音合わせをしますと書いてあった。これでは二種類の音で練習をしなければならない。しかし、もし本選に出場出来たら、音合わせのとき、音楽にはさも精通しているような顔をして、マイナス四音でお願いしますと言うのも楽しいかもしれない。

初めてのこといえ、何かと問題が多い。しかし、本選に出場したいとの思いがフツフツと湧いてきている。

東京と横浜にいる娘が、孫を連れて応援に帰省することになった。我が家に突然、祭りが来たようだった。本選の観覧は、十倍の競争率だったとかで抽選は終わっている。妻も一枚出したがハズレだ



った。予選会は入場が自由なのでそこで応援するという。こうなると張り切ざるをえない。

カラオケは一パツク二時間制となっていて、一人カラオケでは歌い続けることになる。採点が、八八点と表示されると、「もつと頑張ろう」と歌い、そして九十点となると「ヨシ、もつと」となり、声を張り上げた。

そしてカラオケ店通いが、隔日から毎日となっていた。さらにICレコーダーに録音して、ぶどうの販売をしながら、お客様がいないときは店で歌った。

カラオケ先生の指導で原曲とマイナス四音の両方で声を張り上げていると、予選会の三日前に、喉が痛く声が出なくなつた。歌い過ぎにより喉を痛めたようだ。

これは大変と、のど飴を舐たり、首や喉をマッサージして、カラオケ店通いを中止した。声を張り上げて歌うのもやめたが、口ずさむ程度には歌った。

予選会当日、いつもの通り五時に起き、ぶどうの収穫をした。朝食をかき込んでから直売所に持って行った。袋を外して、等級別に分類する。箱詰、バラ売りの準備を終えて、店番をした。

「孫たちがいるので遅くなつた」言いながら十時頃、妻と娘と孫たちが来た。本日の品揃えを説明して引継ぎをした。この土日はかきいれどきなで店を閉めるわけにはいかない、妻には申し訳ないが店番をしてもらうことになっている。

会場の市民会館に着くと、既に受付は始まっているのかかわらず、多くの人が並んでいた。出場ハガキを出すと、エントリーナンバー一三七と書かれたワッペンを出して、「左胸に貼って下さい。これがあると会場の出入りは自由です」それとビニル袋を渡された。中には写真引換券と記念バッジが入っていた。

会館内に入るとほぼ満席だった。中央

のカメラ横のシートに腰を下ろした。会場内はカラフルな衣装を着た出場者らしき人が多かった。着物姿に小さい日の丸の小旗と、巾着と杖を持った女性が見える。岸壁の母を歌うのだろうか。全身金色の服を着た男性もいた。松健サンバを歌うのだろう。小学校の体操服に帽子の人もいる。彼は何を歌うのだろうか。

舞台に眼を転じると、NHKのど自慢のデコレーションが設置済みだ。左手にはピアノ、ドラム等の楽器が、右手には長椅子が二列並べてあり、その後ろには鐘が置いてある。舞台ではスタッフが忙しく動き回っている。この舞台で熱唱できるかと思うと胸が高まってくる。

予選会が始まつた。エントリーナンバー順に二十組ずつ舞台右袖に集まる。舞台右手に置かれた長椅子に座り、歌った人が舞台を降りると、順に席を前へ詰め舞台中央に進んでいく。中央に来ると床にスタンバイと書かれた位置に立ち前の人が歌い終わるのを待つ。前の人から、マイクを受取ると、舞台センターに進み、曲が流れてくるのを待って歌い始める。一人の持ち時間は、前奏を含めて四〇秒程度だ。曲の途中で「ありがとうございました」のアナウンスが流れて、演奏が終了する。宗右衛門町ブルースは前奏が二〇秒なので正味一〇秒しか歌えない、もつと歌わせてほしいな。

舞台を降りた人は、舞台下で小田切アナウンサーのインタビューを受ける。

演奏は生バンドでピアノ、ドラム、ギター、エレクトーン二人の五人だ。四時間て二五〇曲を演奏する。

歌う順番は、曲の題名のアイウエオ順だ。二番目の人は愛燦燦を情感を込めて歌った。続いて三番目の人も四番目の人も五番目の人も同じ曲だった。曲が同じだと比較されるので辛いな。岸壁の母や、女の道も複数の人が歌った。

いよいよ私の番だ。前の人からマイク

を受取り、舞台センターに進み「一三七番、宗右衛門町ブルース」と言うと、皆さんの拍手が見えた。観客席は九〇%ほど埋まっている。観客の顔も良く見える。ステージ前に小型のテレビモニターがあり、加西市、のど自慢大会、ゲスト前川清、香西かおりの文字が見える。テレビ用のカンペ（カンニングペーパー）だ。前奏が流れてきた。マイクを持つ右手がリズムをとり始めた。体も動いてきた。出だしのきいつとを注意して歌おう。いつもと同じ気持ちだ、上がっていない。気合は十分だ。

「きいつと来てねえと泣いていた。可愛あの娘は うぶなのか」順調だ。山場の宗右衛門町ヨーまで歌わせてくれ。いけそう。宗右衛門町ヨーと声を張り上げたところで「ありがとうございました」のアナウンスが入り演奏が止まった。大きな拍手が暖かく感じられ、歌手になった気分、嬉しかった。軽く会釈をしてマイクを次の人に渡し舞台を降りた。小田切アナウンサーの前に座った。

「農業をされているんですね。何を栽培されていますか」

「ハイ、お米とぶどうです」

「ぶどうは色々な種類がありますよね。どんなぶどうを栽培されていますか」

「加西市特産のベリーAと大粒のシャインマスカット、ピオーネ、籐稔などです」

「何年栽培されていますか」

「リタイヤして十一年になります。その前は勤めながら両親を手伝っていました」

「ありがとうございます」インタビュ―は終わった。ぶどうの質問があったということは脈アリだ。

「厳正なる審査を行いました。結果を発表します。エントリーナンバーを言いますから舞台上がってきてください」

「それでは最初は四十番の方」拍手とともに満面の笑顔で舞台に駆け上がった。「次は〇〇番の方です」「次は〇〇〇番の方です」呼ばれた人は身体中に喜びが溢れていた。次は一三六番の人です。なぜかこれで私はないと思った。案の定、次は一八八番だった。

夢と、かつてない楽しみとワクワク感を与えてくれた夏は終わった。久しぶりに興奮した時間を持つことができた。なかなか経験できないことばかりだった。そんな中、ぶどうの販売で忙しい時にカラオケや予選会出場で、妻には迷惑をかけた。けれども娘や孫も帰って来てくれたこともあり、楽しい時間を過ごせたのではなかったのだろうか。

今回の、のど自慢出場を反省すると、私の戦略は間違っていないかったと思っている。本選のテレビを見たが、山田錦の栽培を支援している市の職員が出場していた。私はこの人に負けたんだ。

のど自慢の冒頭、ぶどう園で作業する二人の若者の映像が流れた。それに比べ山田錦の画面は少しだけだった。これも彼に軍配が上がった理由なのだろう。

それと予選会の様子をビデオで見たが、色の黒い小柄のお爺さんが難しい顔をして歌っていた。テレビ映りは良くないし、華がなかった。歌もあまり上手とはいえないかった。これが一番の大きな要因なのだろう。

本業を投げ出して歌ばかり歌っていた能天気な私は、長生きできそう。

平成二九年九月



